

招待席

釋 迢空

しゃくちょうくう 日本の民俗学、国文学、国学の研究者・折口信夫（おりくちしのぶ）の号。1887（明治20）年～1953（昭和28）年。大阪府西成郡木津村（現在の大阪市浪速区）生まれ。國學院大學教授、慶應義塾大学教授などを歴任。文学博士。柳田國男とともに日本の民俗学の基礎を築いた。1945（昭和20）年、養嗣子の折口春洋はるみを疏黄島で亡くし、敗戦の詔を聞き箱根山荘に40日間籠もる。1948（昭和23）年、『古代感愛集』により芸術院賞受賞、第一回日本学術会議会員に選ばれる。掲載作は一般的に目にしやすいよう、1947（昭和22）年、青磁社版から抄録した日本現代詩大系（河出書房）第9巻を底本としたが、青磁社版は、占領下の出版で、十分な編集が出来なかったとして、迢空は、その後、青磁社版の『古代感愛集』を解体し、編集し直して、1952（昭和27）年、角川書店から再刊していることを明記しておきたい。校正に当たっては、「折口信夫全集」掲載の角川書店版も参照した。抄録ではない形で、『古代感愛集』を読みたい場合は、「折口信夫全集」を探すことをお勧めする。電子文藝館では、折口春洋作品『鶺鴒が音』抄を掲載している。

『こだいかんないしふ古代感愛集』抄

《目次》

追悲荒年歌

幼き春

白

夏日感傷 四章

やまと恋

ゆき

葎

追悲荒年歌

ちゝのみの 父はいまさず、
はゝそぼの 母ぞ かなしき。

はらはらの我と、我が姉
日に 夜に 罵ばえにけり。

怒ります母刀自見れば、
泣き濡れて くどき給へり。
そこゆゑに、母のかなしき。

家荒れて 喰ふものはなし。
庭寒く 鳥もあそばず。

あはれ かの雀の子らは、
軒の端ゆ 顔さし出でゝ
ちゝと鳴き くゞもり鳴きて、
声やめぬ。ふた声ばかり――。

雀子も、餓ゑ寒からむ。
あはれ／＼ 喰ふ物やらむを――
腹へりて 我も居にけり。
頻々に いたむ腹かも。

晴るゝ日の空の青みに、
こだまするもの音もなし。
静かなる村の日ねもす――
村びとも みなから飢ゑて、
ま昼すら 寝貪るらむ。

朝明よりものに行きて、
帰り来し姉のみことの、

我を見て あはれと言らし、
町人の、姉にくれたる
蕎麦の粉の練れる餅の
焼きもちひ 喰へと言ひて、我に給びたり。
くるゝ時、我を見し目の
姉が目の さびしかりしを
髻オモカゲに 今も忘れず。

ひた喰はゝ 片時の間ぞ。
喰はざらば 腹ぞ すべなき。
蕎麦もちひ 惜しみ、たしみて
ねもごろに 我が喰ひをるに、
ほろ／＼と とすれば崩クえて
もろくくづるゝ蕎麦の粉の すべもすべなき

反歌

いとけなくて 我は見にしか。野山にも 交カタ
らひ浅き若うどの群ムれ
なか／＼に 鳥けだものは死なずして、餌エば
み乏しき山に 声する
家に養カふものは しづかになりにけり。馬す
ら あしを踏むこともなし

幼き春

わが父に われは厭はえ
我が母は 我を愛メクまず
兄 姉と 心を別きて

いとけなき我を 育しぬ。

童ワラハにて 我は知りたり――
まづしかる家の子すらに、
よき親を持ちて ほがらに
うれしけき日毎遊びに、
うちあぐる声の たのしき。

陰深き家の 軒ツツべに
其ツを見ると 伊タ、ズみ居れば、
おのづから 爪ツ※昨クはれつゝ。

よき衣キヌを 我は常に著キ
赤き帯 高く結びて、
をな子の如く装ひ ある我を

子らは嫌ひて、
年おなじ同年輩ヨチコドチの輩も
爪弾きしつゝ より来ず。

たゞ一木 辛夷コブシ 花咲き
春の日の ほろゝに寒き

家裏の蔵庭に居て、
つれ／＼と、心疲れに
泣きなむと わがする時――

隣り家ヤと 境サカふ裏戸の
木戸の外トに 人は立たして、
白き手を 婉タヨにふらせり。

我が姉の年より 長タけて、
わが姉と 似てだに見えず
うるはしき人の立たして、
我を見て ほの／＼笑める――。

しば／＼も、わが見しことを
今にして、思ひし見れば、
夢の如　その倂薄れオホホ
はかなくも　なりまさるなり

もの心つけるはじめに
現しくも　見にける人アツ
年高くなりぬる今し、
思へども、思ひ見がたく　いよゝなり行く

反歌

春早き辛夷の愁ひ咲きみちて、たゞに　ひと
木は　すべなきものを

白

梢高きウレ轆轤木ロクロキの花
下枝深きシタエ常山木クササギの花
花低く這ふ　鴉瓜

卯月の村は、せつなきほど白くて、
さらになほ　白じろと　咲きつゞく――。

空木ウツギの花の　赤く褪カ変りたるが、
稀まれに　いと安けて、
村びとの心を　悲しがらしむ

夏日感傷 四章

道のべの 声澄む時

日の光りさやけき昼

唐松の繁^シみ立つ道に、

わが影の あまり幽^カけき

×

道の上の昼の幻

たちまちに 過ぎ行きにけれ――。

翡翠^{ソビドリ}のあさき裳の色

ひたすらに 風に靡きて

×

思へども すでに漠々^{オホ}し。

山陰の白沙^{シロ}の上に

わか来し人を思へば、

かつ／＼に 頬をつたふもの

×

鳥の子の かならず出でゝあそび居し この

山陰を 見むと来にけり

やまと恋

をみな子よ。我が名を知るや――。

女ごの群れに向ひて

ことごとひも為^セずて 過ぎ来し
我^{ワレ}の齡^{ヨシ}の五十^{イソ}ぢの末^{スエ}の――
晩年^{イリマヘ}に言^{コト}ひ出^ツる言^{コト}の、

くどくどし 老いのくり言^{ゴト}
洗^{ニガ}面^ガみつゝ 然^{シカ}勿^ナ嫌^ナひそ――。
をみな子の住める家居は、
門^{カド}べすら 清くかゞやき
飼^カふ犬^{イヌ}の声^{コエ}も はなやぐ――。

女^メごのよれる牕^{マド}べの
二^{フタ}藍^{アキ}の牕^{マド}かけ揺^{ユス}り
洩^{ウタ}る詠^{ウタ}の聲^{コエ} やみて後^{ノチ}――
なほうたふ声ある如く

にほひつゝ 道にひゞきぬ――
をみな子の著^ケせる衣^イの
花^ハぐはし 桜^{サクラ}のたもと――
照^テりぐはし 春^{ハル}のふり袖^{スリーブ}――
結^ユひ垂^タるゝ金^{カネ}の高^{タカ}帯^{オビ}――
家^イ出^デでゝ来^キる そよめきは、
謡^{ウタ}はざる歌^{ウタ}と とよみて
若^{ワカ}人の心^{ココロ}を ゆりぬ――。

をみな子は かく好^{コト}かりけり――。
女^メごのよかりし世^ヨには、
男^ヲの子^コらの道^{ミチ}行^{ユク}きぶりの
姿^{サマ}すら 清^{スガ}くしまりて、
言^{コト}ふことも 訛^{マタ}濁^タみては言^{コト}はず――
しきしまの やまとの国^{クニ}の
若^{ワカ}き世^ヨ代^{ハヒ}の恩^{オン}寵^{ホヒ}満^タりて
憑^{タノ}しみ深^シく ありしか

をみな子よ。すこし装^{カサネ}はね――。戦^{タケ}ひに負^{マケ}けし寂^{サマシ}しさ

国びとの瞳さへ 萎み 佗しさは 骨に徹れり――。
あゝ骨に透る――悔い哭き――。
しかすがに 然うらぶれて
をみな子は 道行くべしや――。

若き日は いとも貴し。若き日に復や還らむ。

かぐはしき深き誓言 日の本の恋の盛りに――、

女子と物言ひ知らず 無用に過ぎにしわが名

懇ろに悔いつゝ言ふを 空言と聞くこと勿れ。

をみな子よ――。恋を思はね。

美しく 清く装ひて 誇りかに道は行くとも、

倭恋 日の本の恋 妨ぐる誰あらましや――。

恋をせば 倭の恋。

美しき 日の本の恋。恋せよ。処女子

反歌

たはれめも 心正しく歌よみて、命をはりし

いにしへ思ほゆ

をとめ子の清き盛時に もの言ひし人を忘れ
ず。世の果つるまで

道のべに笑ふをとめを憎みしが 芥つきたる
髪の あはれさ

ゆき

きざらぎの小野の雪。

静かなる夕凍みに、
人ゆきて還らざる
道に出でゝ もの思ふ。

きさらぎの夕じみに、
道のべの ほの白く
あわ雪の消えのこる
思ひこそ はかなけれ。

あわ雪の消えなくに、
ほの／＼と 積み来たる
けはひこそ かそかなれ――。
夜に入れば、はてもなし、

葎

しづかなる夕に 出でゝ、
ほのかなる道を 往き来す。
かそかなるもの 来寄りて、
我が肩に ふれつゝ過ぎぬ――。

わが耳や 何をか聞きし――。
我が心知らぬ ことばを――。
さゝやきて ものぞ去りにし。
しづかなるゆふべの道に、
かな葎むぐら 一つ 穂を揺る